



に由来する。いわゆる「オックスフォード日常言語学派」のリーダー格だった彼は、哲学的概念を日常言語のレベルに引きもどして批判・検討する活動が続けるいっぱい、そこで得た着想に肉付けしつつ言語行為を分析する体系的構築的な作業に着手していった。しかし彼は1960年に50歳を待たずに死去し、自らの手になる体系的著作を残すことはなかった。けっきょく死後の62年に講義ノートをもとにした本『いかにして言葉をもちいてことを為すか(How to Do Things with Words)』(邦題は『言語と行為』)が出版され、これが言語行為論の実質的な出発点となる。夭折したオースティンの着想を引き継ぎ、一定の完成度をもつ理論に仕立てあげたのが、アメリカの哲学者サールであった。オックスフォードへの留学生としてオースティンと出会ったサールは、帰国してカリフォルニアに教職を得た数年後の1969年、言語行為を体系立てて説明する著書『言語行為 (Speech Acts)』を出版する。こうしてオースティン—サール路線というべきラインが引かれることになったが、これは比較的迅速に「標準理論」の地位を得ることに成功し、以降今日まで、言語行為をめぐる理論的探究は大筋この土台のうえで展開されることになった。しかし筆者の見方では、この土台は不当に狭隘なものであり、言語行為の実相を説明する理論としてはもともと限界をはらんでいた。そこで第1部では、あらかじめはらまれた限界の芽を「一発話主義」「慣習主義」「発語内の力(の両義性)」という「3つのドグマ」として抽出してそれぞれの由来と弊害を考察し、それらを乗り越え、より自然で適用範囲の広い説明法へのみちすじを模索する。

こうした批判的作業を通して見いだされるのは、「話し手の意図」というものが言語行為において占める決定的な位置である。それを受けて第2部では、オースティン—サール路線とは一線を画して試みられてきた「話し手の意図」を軸とするアプローチを組上に載せ、それを言語行為の理論として適用する可能性をさぐる作業を行う。「話し手が聞き手に向けて発話によって何らかのことを意味する行為」というものを、話し手が聞き手にたいしてもつ意図、しかも「聞き手に一定の効果をもたらそうと意図し、かつその意図を知らせることによってそうしようとする意図」といった重層的な意図によって説明する理論は、オックスフォードでのオースティンの同僚哲学者グライスによって構想された。その原型は日常言語学派が隆盛するさなかの1957年に公表された論文「意味 (Meaning)」で提示され、以降長年にわたりいくつもの論文や講義で展開されていった。グライスのもともとの目論みは、意味という抽象的なものを具体的な「意味する行為」によって説明し、さらにそれを「話し手の意図」によって説明しつつするという、一種の還元主義的な意味の理論を構築することであった。しかしこの方法は、どこまでも意図が増殖せざるをえないという根本的な欠陥を抱えていた。すなわち、「意味する行為」を十全になすためには、上で示した程度の意図の積み重ねでは足りず、「意図を知らせようとする意図を知らせようとする意図」といったものが次々と要請され、一種の無限後退が生じてしまうのである。そこで第2部ではまず、この難点を検討し、その回避策を探ることが同時にグライス説を意味の理論からコミュニケーションの構造を照らしだす理論に読み替えることにつながる点を指摘する。ついでグライスの「意味する行為」と言語行為論における発語内行為の関係を検討し、いっけん精粗の差——前者がきわめて大まかであるのにたいし、後者は多種多様に分類される——があるかにみえる両者だが、基本的なありようにまで煮詰めたレベルでは大筋重ね合わせることができる構造にあることを見いだす。

こうして見いだされた話し手の意図、すなわち発語内行為一般を生成する根源的な意図は、「聞き手に信念をもたらす」とか「行動をもたらす」といった、きわめて基本的な、いわば必要最小限のものである。そこで第3部では、そうした最小限の意図から多種多様な言語行為が生成される原理を見だし、具体的な生成プロセスを描き出す試みを行う。従来のオースティン—サール路線においては、「慣習的に定められた手続きへの合致によって発語内行為は遂行される」というものが基本的な説明法であった。しかしそうした路線を「慣習主義のドグマ」として批判する本論では、「行為の種類の数だけ特定の手続き

がある」といった発想は避け、むしろ「話し手による世界の事態の提示」というごく一般的な発話のありようから出発し、発話の状況等にてらして必要なだけの解釈プロセスがたどられたところで発語内解釈が出力されるという「枝分かれモデル」を提案する。まず、話し手によって提示された世界の事態は、聞き手によって実現できる種類のものかそうでないかのどちらかである。前者の場合、発話は聞き手に行動をもたらそうとする意図で構成される行動タイプとしての解釈へ、後者の場合は聞き手に信念をもたらそうとする意図で構成される信念タイプとしての解釈へ進む。以下、信念タイプのうち話し手自身が実現できる事態の場合は約束等の「行為拘束型」としての解釈へ、そうでないものは報告等の「主張型」としての解釈へ進む、といったプロセスをたどり、個々の発語内行為が生成されてゆく。こうして、多種多様にみえる発語内行為は、世界の事態の提示という言語のごく基本的なはたらきと、その事態のありように応じた話し手の意図の同定という動的なプロセスによる枝分かれの先に、それぞれの特性や精粗の度合いをともなった解釈出力のヴァリエーションとして位置づけられるのである。

以上、大筋をひとことでいえば、標準理論の批判的点検から原初的な話し手の意図へといういわば解体作業の往路、原初的な意図から多様な発語内行為へという再構築作業の復路から構成されるのが本論である。そして、こうした往還のみちすじからどんな哲学的見通しが得られるかを終章で展望し、しめくくりとする。

## ●各章の要旨

### 序章 「土曜日の朝」と1950年代オックスフォード

言語行為論や「意味する行為」の理論の立役者であるオースティン、サール、グライスといった哲学者たちは、1950年代にオックスフォード大学で濃密な時間を共有していた間柄である。オースティンが主催していた伝説的な研究会「土曜日の朝」のエピソードに示されるように、そこでは哲学の方法として日常言語分析のいとなみが共有され、後年「日常言語学派」と呼ばれることになる哲学的運動が盛り上がっていた。日常言語分析は当初もっぱら批判的作業の手法として用いられていたが、そこからやがて言語や言語行為にかんする理論構築のいとなみが生まれていく。この序章では、こうした「言語コミュニケーションの哲学」の揺籃の地としての50年代オックスフォードの様相、そこからオースティンらが言語行為論を立ち上げていった過程などについて素描し、本論における議論の背景となる思想史的土壌を確認する。

### 第1部 言語行為論の3つのドグマ

#### 第1章 一発話主義のドグマ——発語内の力はどこに宿るのか

言語行為論の標準理論にはらまれる第1のドグマとして「一発話主義」を指摘し、その由来と弊害を検討、それに代わる見方を提案する。一発話主義とは、言語行為の基本単位は一文の一発話であり、主張や命令等の「発語内の力」も一文の一発話ごとに宿る、とする見方である。オースティンがさしたる議論もなく自明のこととして導入した一発話主義は、言語的単位である文とコミュニケーションの単位である発語内行為を一体のものともみなすサールらの姿勢につながる。こうして言語行為論においては、単独の文を聞き手にたいして一方的に発することで完結するような行為がもっぱら考察の対象にされることになった。しかし言語行為の実相を素直にみれば、複数の文の発話や聞き手とのやりとりを通じて一つの発語内行為が行われるのはごく普通のことである。そのような「会話シークエンス」において行われる発語内行為のありようは、不自然で狭隘な一発話主義に代わる見方を見いだす可能性をはらむ。すなわち、ひとまとまりの会話シークエンスにおいて発語内行為が行われることこそ言語行為の常態であり、

一発話で完結するケースはむしろそのなかでの特殊例に位置づけられる、といったヴィジョンが望見されるのである。そしてこのことは、文という言語的単位と、発語内行為というコミュニケーション上の単位のあいだに一線を引くことにもつながる。

## 第2章 慣習主義のドグマ——オースティンの奇妙な論拠をめぐって

発語内行為を「ルールにのっとったゲームの一手」のようにみなす「慣習主義」を第2のドグマとして批判し、それに代わって「話し手の意図」を主眼におく見方を提示する。一定の文を一定の状況で発話することは、いかにして同時に一定の発語内行為を行うことになるのか。それは「慣習」による、というのがオースティン—サール流の標準理論における答えである。すなわち、発話の遂行があらかじめ（明示的に、あるいは暗黙のうちに）定められた手続きに合致することによって当該の発語内行為が遂行される、という発想である。しかしこれもまた、オースティンが「行為遂行的発話」の典型例として命名や結婚といった制度的・儀礼的な発話を挙げたことに由来するドグマである。制度的・儀礼的発話の特徴として、「不適切に遂行する」ということが不可能であることが挙げられる。手続き履行の不備は即、行為そのものの不成立に結びつくからである。しかしより日常的な主張や命令、警告といった行為は、さまざまな仕方でも不適切に遂行されうる。「不適切に結婚する」ということは成り立ちがたいが（そもそも結婚などしていなかったことになる）、「不適切に主張する」ということは状況によっては成り立つのである。たとえば事実誤認にもとづく主張は不適切なものだが、だからといって主張そのものの成立が取り消されるわけではない。こうした差異は、主張や命令といった行為の成立要件が「手続きの履行」ではなく「意図の明示」にあることに由来するように思われる。こうした「意図主導型」の行為は広汎に見いだされる言語行為であり、制度的・儀礼的発話を典型とする「慣習主導型」とは異なるありようで成り立っているのである。

## 第3章 「発語内の力」のドグマ——あらかじめ混同された2つの「力」

第3に指摘しなければならないのは「発語内の力のドグマ」である。主張や命令といった発語内の力についてのオースティンの見方をテキストに即してみていくと、そこには一種の両義性がはさまれていることがわかる。すなわち、「発語内行為を成り立たせる原動力」としての発語内の力と、「成立した発語内行為が発揮する効力」としてのそれである。しかもこれら2つの見方はしばしば同一視される傾向にあり、ひいては言語行為についての不自然な描像に結びつく。すなわち、「発揮する効力」に対応する細分化された「遂行動詞（あるいは発語内動詞）」の網の目を、「成り立たせる原動力」のほうにまで覆いかぶせ、「言語行為とは、遂行動詞に対応して細分化されたリストのなかから特定の一つを選択するようにして行われる」とみなす、いわば「リスト選択モデル」である。しかし、実際の言語行為はかならずしも明確なものばかりではない。むしろ日常的には、あいまいで大雑把な言明や、命令ともお願いともつかない依頼が数多く行われている。しかもそれらはけっして出来損ないの行為というわけではなく、コミュニケーションにおいてしばしば十全な役割を果たしている。「分類表モデル」にむすびつく発語内の力にかんする見方もまた、このような言語行為の精粗さまざまな姿を覆い隠すドグマと呼ぶべきものといえるのである。

## 第2部 話し手の意図について

### 第4章 グライスの重層意図説

第1部での批判作業をつうじ、「話し手の意図」というものがクローズアップされてきた。では、発話

において意図はどのように機能しているのか。この章では、その手がかりとしてグライスの理論を取り上げて検討する。グライスは「意味する」という行為を「聞き手に効果をもたらそうと意図し、かつその意図を知らせることによってそうしようとする意図」といった意図の積み重ねによって説明しようと試みた。ただしグライスはこれをあくまで、「意味」というものを根源的に説明しつゝ理論として提示したのであった。しかしそのようなものとしてみると、彼の試みは重大な障壁につきあたる。どこまで意図を積み重ねても十全に「意味する」行為には届かないという、意図の無限増殖の問題である。この点において、グライス説は意味の根源的説明の理論としては挫折する。しかしこの過程から、逆に話し手の意図をめぐる具体的な描像が浮かび上がってくる。すなわち、実現不可能な無限の意図の代わりに現実には何がどう機能しているのか、と問いを反転してみると、言語コミュニケーションにおける話し手の意図の実際の構図——「執行的意図」と「コミュニケーション的意図」という2つの意図の明示——がみえてくるのである。こうしてグライス説は、言語コミュニケーションの説明理論として読み替えられる。

## 第5章 意図主導型と慣習主導型

第2章でみたように、オースティン—サール流の標準理論は手続きの明確な「慣習主導型」の行為を中心的なものとみなし、そのありようを言語行為一般の説明に拡大適用しようとした。しかし、「意図主導型」の行為にそうした説明はなじまない。では、言語行為一般における両タイプの関係はどうなっているのか。この点にかんしては、言語行為一般のなかに原理を異にする二種類の行為があるとするストローソンや、かけねなしに言語行為と呼べる意図主導型にたいして慣習主導型はむしろ慣習的行為一般に属するものとみるバック&ハーニッシュなど、いくつかの見方が提示されてきた。この章ではこうした既存の見方を批判的に検討し、慣習主導型を言語行為と一般的な慣習的行為のあいだのゆるやかな移行領域として位置づける見方を提案する。そして、その構図のなかで、話し手の意図とその認知を軸とする意図主導型の行為は、言語行為の基本部分をなす領域として再布置されるのである。

## 第6章 意図のミニマリズム

話し手の意図が言語行為一般の中心軸だとして、ではそれをどのように同定すればよいのか。ことはいっけん簡単で、語彙として豊富にある遂行動詞をもちいて「約束しようとする意図」「警告しようとする意図」といった具合に同定すればいいようにみえるが、それだけでは第3章で指摘した「発語内の力のドグマ」に陥るように思われる。そこでこの章では、遂行動詞の存在を前提することなく、むしろグライスの話し手の意図の単純なありかたをできるだけ保持しながら、それを発語内行為の成立原理としての意図へと読み替えていく試みを行う。話し手の意図のありようを基本的なところまで煮詰めていくと、聞き手に信念をもたせようとする「信念タイプ」と、行動を起こさせようとする「行動タイプ」のたった2つに集約されてしまう。これと対照的に現実の発語内行為はきわめて多種多様だが、サールが提示した「適合方向」などの分類観点を援用すれば、5種程度の基本パターンにまとめることができる。ただし、サールのいう「適合」は、あくまで言葉と世界のあいだの関係についてのものだった。その先をさらに掘り下げていくと、むしろ言葉と聞き手のあいだの適合関係が見いだされる。発話においてさしあたりは受け身におかれる聞き手は、発話された言葉になんらかの仕方で適合をはからなければならないが、それは大きく分けて信念形成によるか行動(もしくは行動への意図形成)によるかのいずれかである。この地層において、グライスの話し手の意図の基本的なありようと、言語行為を構成する意図のそれとが、大筋の一致をみるのである。こうして、多種多様な言語行為を生成するおおもとにある、話し手の

意図の必要最小限のありかたが見いだされる。すなわち、上記の「信念タイプ」と「行動タイプ」の2種の意図である。

### 第3部 発話解釈と行為生成

#### 第7章 行為理解と発話解釈

第2部までの「解体作業」で、必要最小限の話し手の意図のありようがたった2種類のところまで煮詰められた。次に必要になるのは、そこから再出発して多種多様な発語内行為が生成されるプロセスを描き出す「再構築作業」である。そこでまずこの章では、多種多様な言語行為の構成原理をさぐる基礎固めとして、話し手の意図と発話解釈の関係を考察する。まず、いったん言語行為の観点からはなれ、広く行為一般における意図なるもののありかたを概略的に考察する。ついで、そこから見いだされる行為における戦略のありかた、そのなかでのコミュニケーション行為の位置づけといった具合に絞り込み、結論として話し手の意図の主要部分が聞き手の解釈プロセス（より正確には、聞き手をしてたどらせたい解釈プロセス）とほぼ同一視できることを示す。すなわち、コミュニケーション行為とは行為の対象を心ある存在とみなし、そのことを織り込んで行われる志向戦略的行為の一種だが、そのなかでも対象による行為者の意図理解を必須の要件として含んでいる特殊例なのである。この観点からみると、発語内行為を構成する話し手の意図についての問いは、発語内行為にかんじていかなる解釈プロセスが意図され、どのようなプロセスがどのような行為を構成するか、といったより具体的な問いに読み替えられることになる。

#### 第8章 発語内行為の生成

「再構築作業」の試みとして、この章では言語行為が構成・解釈されるプロセスを具体的に素描する。まず、解釈プロセスがよりどころとする原理として、「最小のコストで最大の効果を」という経済性の原理のいわば言語行為版があるのでは、という仮説を提示する。そこから見いだされるのは、できるだけ手短かな解釈プロセスをたどり、精度が必要十分になった時点で解釈をやめて解釈出力——信念形成や行動選択——をすばやく出す、いわば「発話解釈のミニマリズム」というありようである。ついでその原理にのっとって、具体的な解釈のプロセスを素描する。ここでの眼目は、慣習主義的アプローチのように行為ごとの個別の構成プロセスを追うのではなく、包括的な太い幹から始まって、必要十分なだけ枝分かれした時点で行為構成と解釈が終結するという、動的な「枝分かれモデル」を提示することである。この枠組みでは、たとえば「言明」は幹の太い部分で終結し、「反論」はその先の枝分かれした部分まで行って終結する行為として説明されることになる。枝分かれと終結の一般的原理として働くのは経済性の原理だが、個別の行為生成の道具立てとしては、第7章でみた「言葉—聞き手」や「言葉—世界」の適合関係が軸になってくる。このような、多様な精度をとともう枝分かれのなプロセスとして発語内行為の生成を描き出すことで、本論でずっと問題にしてきた「多種多様であると同時に精粗もさまざま」という言語行為のありようを自然に説明するみちすじが見いだされるように思われる。

#### 終章 言語とコミュニケーションの関係と無関係

しめくくり、本論の考察を通じて望見される哲学的ヴィジョンについて言及する。まず、言語行為の生成において本質的なものは実は言語それ自体ではなく、言語を通して提示される世界のありように存することを指摘する。提示された事態は聞き手によって実現可能なものか否か。あるいは、聞き手の将来の行動にかんして拘束的にかかわるものか否か。こういった、言語ではなく事実についての知識の

共有をよすがにして発語内行為は生成されるのである。そしてこの点は、言語は何のためのものか、あるいはそもそも何かのためのものであるのか、といった根源的な言語観にかんしても一つの照明をあてるものであるように思われる。ついで、そもそもなぜ発話解釈において発語内行為の解釈が必要とされるか、それは本当に必要なのか、という問いを検討する。確かに発語内解釈が不要な社会を想像することは可能だが、現在私たちの生活の土台になっている「常識心理学」を前提とするかぎり、それなしでは社会はひどく非効率なものになってしまう。しかしこのことは、常識心理学そのものの改変不可能性を含意するものではない。それがいつか別様に移り変わり、発語内解釈抜きで発話解釈、もしくは言語コミュニケーションが行われるようになることも、じゅうぶんに想像可能なのである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、J.L. オースティンによって創始され、J. サールによって体系化された言語行為論 (Speech Act Theory) の基本前提を批判的に考察し、その難点を克服するために H.P. グライスの「話し手の意図」を軸とするアプローチを補完的に援用することを通じて、発話解釈をめぐる独自の「枝分かれモデル」を提起し、言語行為生成の原理を解明しようと試みたものである。

まず序章『「土曜日の朝」と1950年代オックスフォード』において、論者は言語行為論成立の土壌を探るため、その創始者であるオースティンが主宰した研究会「土曜日の朝」の雰囲気を活写し、オックスフォード大学を中心に集まった日常言語学派の哲学者たちの相互交流を描き出すことによって、本論文の思想史的背景を明らかにする。

第1部「言語行為論の3つのドグマ」では、オースティンの言語行為論の基本前提の中に含まれている暗黙のドグマが取り出され、批判的検討にさらされる。

第1章「一発話主義のドグマ——発語内の力はどこに宿るのか」では、オースティンが言語行為の基本単位を一つの文の発話に求め、命令や約束などの「発語内の力」もそのような一発話に宿ることが自明の前提とされていることが指摘される。論者によれば、これはドグマにすぎず、通常の言語行為では複数の文による話し手と聞き手のやりとりの中で当該の発語内行為の実現が目指されるのが常態なのである。論者はこれを「会話シーケンス」と呼ぶことで、新たな理論的展望への手がかりを示唆する。

第2章「慣習主義のドグマ——オースティンの奇妙な論拠」において、論者は発語行為が同時に発語内行為となりうる根拠をオースティンが「慣習 (convention)」に求めていることをドグマとして退け、それが制度的・儀礼的発話を典型例とする考察に由来する偏見であることを指摘した上で、言語行為の成立要件が「(慣習的) 手続きの履行」であるよりは「(話し手の) 意図の明示」にあることを明らかにする。

第3章『「発語内の力」のドグマ——あらかじめ混同された2つの『力』』では、言語行為論の中心概念である「発語内の力」が、発語内行為を「成り立たせる原動力」と同時にそれが「発揮する効力」という二重の意味をもっており、オースティンの議論で両者がしばしば混同される傾向にあることが指摘される。オースティンの言語行為論が最終的に遂行動詞の「リスト選択モデル」や「分類表モデル」に行き着いたのは、このドグマに囚われた結果なのである。

以上の第1部の考察は、これまで自明視されてきた言語行為論の基本前提をドグマとして捉え直し、それが言語行為論にまつわるアポリアの源泉であることをオースティンのテキストに沿って解明した点において、また「会話シーケンス」という新たな概念を導入して考察の領域を拡大した点において、従来の言語行為論に見直しを迫る理論的収穫といえることができる。

続く第2部「話し手の意図について」では、言語行為論のドグマを克服する方途としてグライスの重層意図説が検討され、それを通じて話し手の意図を「信念形成」と「行動誘発」に収斂させる「意図のミニマリズム」が提起される。

第4章「グライスの重層意図説」では、「意味する」という行為を話し手の意図の積み重ねによって説明するグライスの試みを取り上げられ、仔細な検討がなされる。その結果、グライスの意味理論は意図の無限増殖を招くことで結局は挫折するが、「執行的意図」と「コミュニケーション的意図」の区別を明示したことにおいて、それをコミュニケーション理論として読み替える可能性が明らかにされる。

第5章「意図主導型と慣習主導型」において、論者はストローソン、バック&ハーニッシュなどの言語行為論を祖上に載せながら、それらの理論的射程を批判的に考察し、そこから従来二元的に対立してきた「意図主導型」と「慣習主導型」の言語行為を一般的な行為の布置の中に改めて位置づけ直すを試みる。

第6章「意図のミニマリズム」は、第2部の結論として大胆な問題提起を行う。すなわち、話し手の意図の基本的あり方は、聞き手に一定の信念をもたせようとする「信念タイプ」と聞き手を一定の行動に向かわせる「行動タイプ」に集約されるというのである。論者はこれを、話し手の意図の必要最小限のあり方として「意図のミニマリズム」と名づける。

以上の第2部は、グライスの重層意図説を基盤にしてそれをコミュニケーション理論に換骨奪胎することを目指した意欲的な試みとして高く評価できる。特に、話し手の意図を信念タイプと行動タイプに収斂させる「意図のミニマリズム」をめぐる一連の論証は、先行業績を踏まえているとはいえ、論者の並々ならぬ力量を示すものである。

最後の第3部「発話解釈と行為生成」は、これまでの考察に基づきながら、さまざまな発話内行為の生成プロセスを独自の「枝分かれモデル」を提起することによって再構成しようとするものである。

第7章「行為理解と発話解釈」において、まず論者は行為一般の観点から「意図」のあり方を志向的戦略行為（デネット）という観点から考察し、次いでコミュニケーション行為における話し手の意図は、聞き手の解釈プロセスとほぼ同一視できることを明らかにする。そのことによって、発話内行為を構成する話し手の意図に関する問いは、解釈プロセスをどのように構造化するかという具体的問題に帰着するのである。

第8章「発話内行為の生成」では、言語行為が構成され解釈される具体的プロセスが独自の「枝分かれモデル」に基づいて詳細にたどり直される。その際、解釈プロセスを統制しているのは、「最小のコストで最大の効果を」という経済性の原理であることが指摘される。これを論者は「発話解釈のミニマリズム」と名づける。

以上の第3部の考察は、「意図のミニマリズム」と「発話解釈のミニマリズム」を統制原理として、会話シークエンスにおける話し手の意図の解釈プロセスのダイナミズムを「枝分かれモデル」にしたがって具体的に解明したものであり、言語行為論への独自の貢献として高く評価することができる。

終章「言語とコミュニケーションの関係と無関係」では、これまでの考察から引き出される哲学的ヴィジョンについて述べられる。それによれば、言語の本質をコミュニケーション機能に求めるコミュニケーション的言語観はおそらくは誤りなのであり、言語の本質は世界の事態を提示する「表象機能」に存するものと考えねばならない。最後に論者は発話解釈において発話内行為の解釈が不必要であるような「察し合い社会」を思考実験として想定し、そのような社会は非効率的ではあるが十分に想像可能であることを示唆して論を閉じる。

本論文は言語行為論の歴史的展開を関連文献を精査することによって周到にたどりながら、そこに通



底するドグマを批判的に取り出し、その難点を回避するために話し手の「意図」の概念を考察の中核に据え、いわば「ドグマなきコミュニケーション論」を新たな概念装置を導入しながら再構成しようとしたものであり、その目的は十分に達成されたといえることができる。終章で展開された哲学的ヴィジョンにはいささかの議論の飛躍と説得力に欠ける論点が散見されるものの、これは今後の研鑽に待つべき事柄であろう。総じて、本論文が、言語哲学の分野に新たな知見をもたらし、斯学の発展に大きく寄与するものであることは疑いを容れない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。